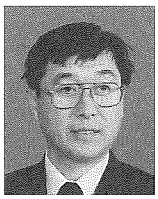
# 特別記事

## 世界のドラフトホース
## (2) フランス，ベルギー編

柏村　文郎



柏村　文郎（かしわむら　ふみろう）
1950年生まれ。1997年に帯広畜産大学畜産学研究科修士課程を修了。1977年から4年間全国酪農業協同組合連合会に勤務。1981年に帯広畜産大学助手採用，2001年より同大学共生家畜システム学講座教授，現在に至る。学生時代4年間馬術部を経験し，現在は馬術部部長。研究教育は乳牛の管理と馬学。研究室では9頭の馬を学生と共に管理している。

### 1．フランスの馬の品種

日本で最も有名なフランスの馬の品種は何であろうか。アラブ競馬として知られているアングロアラブは，アラブにサラブレッドのスピードを持つようにフランスで作られた品種である。ヨーロッパ大陸で人気の高い競馬は，サラブレッドの駈歩競馬よりむしろトロッターフランセなどの速歩競馬として知られるハーネスレース（繋駕競走）である。障害飛越用の馬として人気のあるセルフランセは，1950年代から乗用に適した半血種に広く用いられていた呼称（セルは鞍のこと）であるが，今は一つのスタッドブックに集約されている。かつて乗輓兼用の多用途馬として日本にも多数輸入されたアングロノルマンという品種はもういない。そのスタッドブックはセルフランセに引き継がれた。馬に興味のある人は，フランス南部のローヌ河口のデルタ地帯にバルブ馬を先祖にもつと言われる再野生馬，カマルグという馬がいることを知っているかもしれない。

その他，フランスにはさまざまな馬やポニーの品種がおり，その数は30品種にも及ぶともいわれている。主な品種の割合を繁殖雌馬の頭数から大雑把に分類すると図1のようになっている。この表から気がつくのは，ドラフトホース（輓系およびコブ型）と呼ばれる馬たちが，全体の30％もいることである。ちなみに，日本では約60％がサラブレッドであり，乗用馬が10％，そしてドラフトホース（輓系馬または農用馬）は20％程度となっている。

### 2．フランスのドラフトホース

フランスには，日本で馴染みの深いペルシュロンやブルトンを含めて9品種のドラフトホースがいる。それぞれの品種が主に飼養されている地域と国立種馬所を図2に示した。ドラフトホースは，その地方で古くから飼育繁殖された馬なので，日本の在来馬と同様に飼養地域はかなりはっきり分かれている。

次にそれぞれの品種の特徴を簡単に紹介する（図3

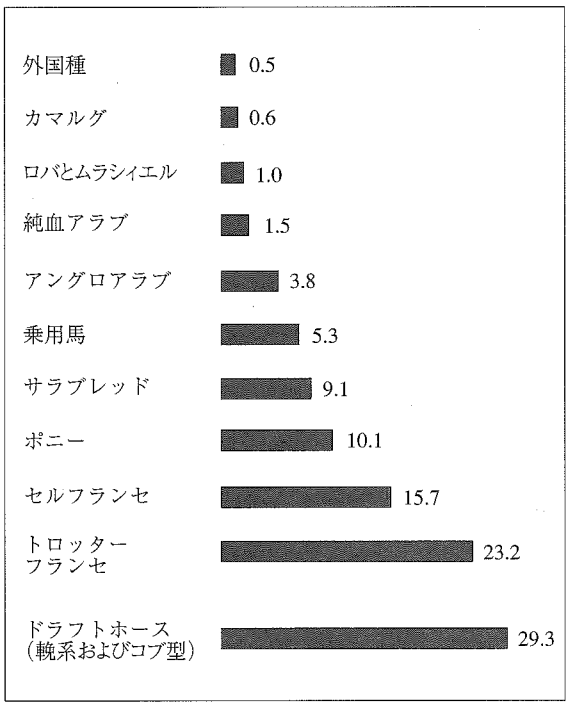



図1　フランスの繁殖雌馬頭数の割合（％）

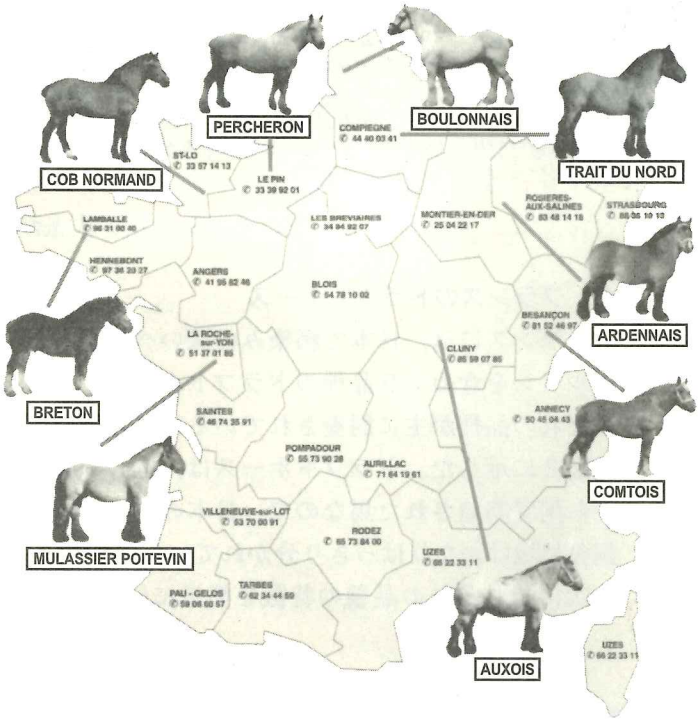



図2　フランスのドラフトホースと23ヵ所の国立種馬所

に全品種を載せた)。

**a）アルデンネ（Ardennais）**：フランス語では「アルデネ」と発音する。フランス北東部とベルギー南部にまたがるアルデンヌ地方で主に飼育されている。その力と物に動じない気質が森での運搬作業やレジャー用馬車の牽引のように，辛抱強く，ゆっくりした仕事に向いている。この馬の由来は，紀元前5万年ごろ狩猟の対象であった野生馬の直系の子孫とされ，ヨーロッパのドラフトホースの中で最も古い品種の一つである。ローマ時代にはシーザーが戦争用に改良し，ナポレオンの時代にはかなりの東洋種の血が導入された。その結果，体高が低く，持久力に富み，粗放的管理にたえる丈夫な馬ができあがった。さらに19世紀には，ベルギー輓馬の導入で，多少大型になるとともに力強さが加わった。平均体重は700～1,100 kg，体高は158～160 cm。1929年からスタッドブックが整備された。1994年の出生数604頭。

**b）オクソワ（Auxois）**：アルデンネに近い品種で，ブルゴーニュ地方のオクソワ地域の雌馬とノール輓馬（後述），さらに最も体の大きいベルギー輓馬の種雄馬との異種交配によって生じた。歩幅が大きくて自由闊達な速度の動きが特徴で，耐久性と敏捷性の特徴をもつため大型馬車用馬として人気がある。平均体重は750～1,100 kg，体高は160～168 cm。スタッドブック成立は1913年。1994年の出生数156頭。

**c）ブーロンネ（Boulonnais）**：東洋系の血（アラブ）を数世代入れることで華麗さと気品が備わった。長い間，ドーバー海峡の港町ブローニュ・シュル・メールからパリへ鮮魚を輸送するために使われたが，今日ではその数が減少し存続が脅かされている。毛色は夜道の輸送に目立つようにとほとんどが芦毛（90％以上）である。近年，スポーツや港町のシンボルおよび観光資源として，さらには現代的な馬車競技用馬として活用されつつある。平均体重は700～1,100 kg，体高は155～170 cm。スタッドブック成立は1886年。1994年の出生数263頭。

**d）ブルトン（Breton）**：フランス北西部のブルターニュ地方が原産地である。紀元前3世紀にケルト人がブルターニュ地方の山岳地帯に放った小型の馬がその祖先だと言われている。野菜栽培のための畑仕事や海草の運搬作業のために改良された。かつては，軽い馬車を牽引するタイプのポスチェ・ブルトン（600～650 kg，155～165 cm，postierとは郵便馬車の意）がいたが，今は重輓タイプのトレ・ブルトン（800～1,000 kg，150～170 cm）が一般的となった。また，その中間型のトレ・ポスチェ（800～900 kg，155～165 cm）も残っている。ブルトンは，その適応能力の

高さと馬肉生産の利用価値が認められ，フランス全土に広まり，今ではフランスで最も多いドラフトホースとなった。平均体重は750～950 kg，体高は152～163 cm。1994年の出生数1,633頭。

**e）コブノルマン（Cob Normand）**：ノルマンディ地方の3品種（トロッターフランセ，セルフランセ，コブ）の異種交配によって作出された。特に快速な馬車用馬として，長い間砲兵隊や郵便運搬用として使用されていた。乗用タイプはセルフランセに吸収されたが，コブタイプ（乗輓兼用タイプ）がレジャー用馬車または競技用馬車に使われている。平均体重は550～800 kg，体高は160～170 cm。スタッドブックはなく，国立種馬所が血統を監督している。1994年の出生数781頭。

**f）コントワ（Comtois）**：フランス東部のフランシュ・コンテ地域における真の文化的シンボルである。勇気，耐久力，従順性という特性を持つ非常に素朴な馬である。レジャー用または競技用として乗馬や馬車用としてフランス全土で飼育されている。この馬の由来は，5世紀にフン族に追われたゲルマン民族の一部族であるブンゴンド族が持ち込んだ馬であるとされている。20世紀以降アルデンネの種馬で改良され，品種として固定された。毛色は栗毛または鹿毛。平均体重は600～800 kg，体高は150～160 cm。スタッドブックは1919年から。1994年の出生数2,059頭。

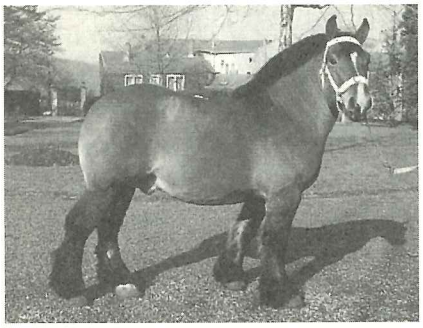
**g）ムラシィエ・ポワトヴァン（Mulassier Poitevin）**：ポワトゥ（Poitou）地方のロバの雄と，10世紀以来の選抜淘汰によって作られたムラシィエ（Mulassier）と呼ばれる馬の雌馬との異種交配により，ラバを生産する目的で飼養されている。この組み合わせで生まれるラバは，ムラシィエの骨盤の大きさのおかげで体格がよく丈夫で，特に沼沢地帯の労働に適している。農作業や山岳地方の運搬用としてラバ生産特別優遇策によって関心が回復したもののこの種は現在も絶滅の危機にある。平均体重は850～980 kg，体高は155～170 cm。1994年の出生数43頭。

**h）ペルシュロン（Percheron）**：ドラフトホースとして最も良く知られた品種で，世界に広まった。その紀元は非常に古いが，スペインのアラブ軍との戦争（732年）や第一次十字軍の帰還によるアラブ馬の導入，さらにはスペイン馬の血液の導入が知られている。東洋馬の血が流れていることから「アラブ馬が，気候の影響とその地方の役畜用途から大型化した」と信じる者もいるほどである。19世紀にアメリカに輸出されて以来，イギリス，アルゼンチン，日本などに数多く輸出されている。この馬は馬車用として際だっており，競技用，レジャー用，アトラクション用として田舎から町まで様々な所で使われている。スタッドブックは1883年にできたが，1966年以降その近縁の馬を統合した。共進会では体高により大格の部（164 cm以上）と小格の部で審査される。平均体重は900 kg，体高は158～172 cm。1994年の出生数779頭。

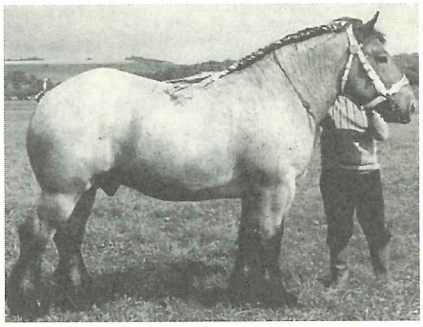
**i）ノール輓馬（Trait du Nord）**：日本語に直訳すると「北の輓馬」である。隣国のベルギー輓馬に非常に近く，Thierache 地方のルルド大平野で農作業に適した素質によって選抜された。この馬は，隣の地方のアルデンネに近いが，より大きな体格をしており，歩く速度もずっと速い。その力と感応性の良さによって現在すばらしいドラフトホースとなった。1994年の出生数202頭。

### 3．ペルシュロン大会

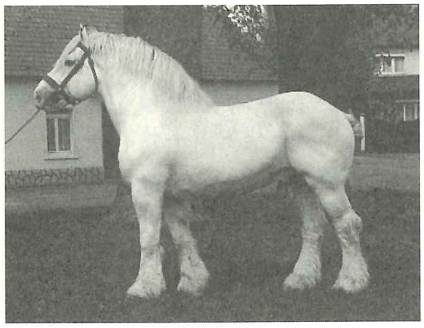
我々の訪問期間中にノルマンディ地方のパン種馬所で，ユーロペルシュロン大会が開催された（写真1，2）。その期間中の会議の中でペルシュロンの改良方針について議論されていた。それは近年アメリカから逆輸入されているペルシュロンをどう扱うかという問題であった。前回述べたように，アメリカペルシュロンはショータイプと呼ばれ，胴が短く，体高が高く，馬車を引いたときに見栄えがするように前肢を高く挙



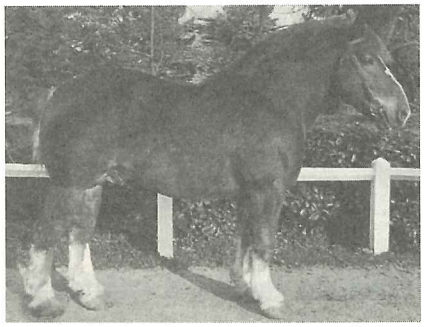
L'Ardennais
a) アルデンネ



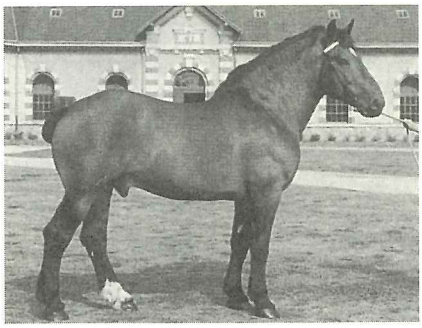
L'Auxois
b) オクソワ



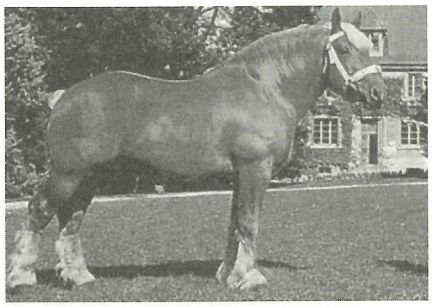
Le Boulonnais
c) ブーロンネ



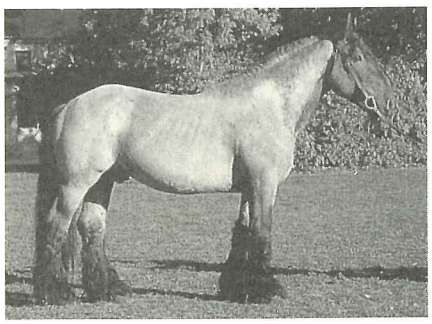
Le Breton
d) ブルトン



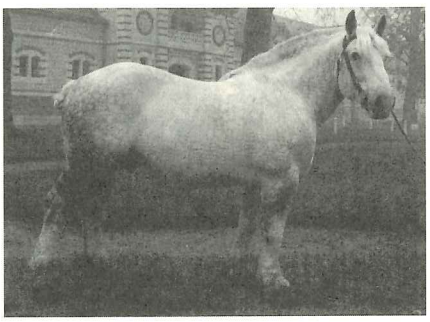
Le Cob Normannd
e) コブノルマン



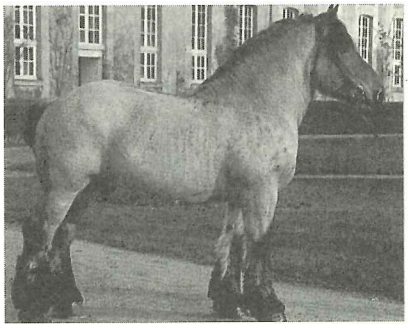
Le Comtois
f) コントワ



Le Mulassier Poitevin
g) ムラシィエポワトヴァン



Le Percheron
h) ペルシュロン



Le Trait du Nord
i) ノール輓馬

図3　フランスのドラフトホース9品種

写真１　ノルマンディ地方のパン種馬所で開催されたユーロペルシュロン大会における馬車総合競技の調教競技（maniabilité）

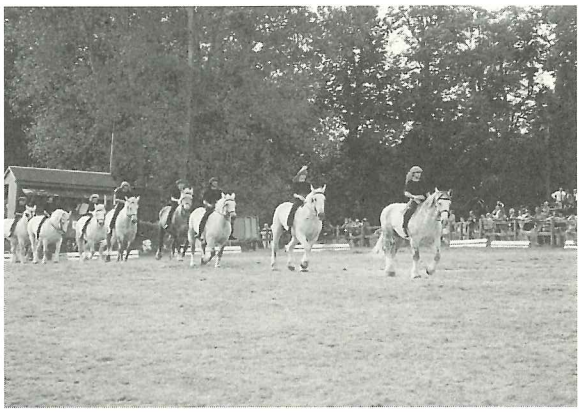


写真２　地元の子供達によるペルシュロン（裸馬）での部班運動

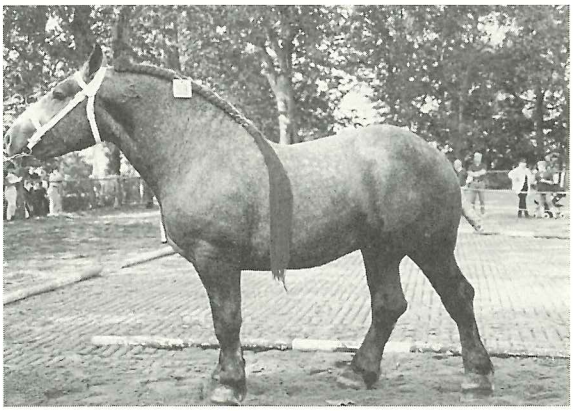


写真３　ペルシュロン雄，２歳，芦毛
共進会大格の部で２位
体高167cm，管囲29cm　36千フランで国立種馬所に買い上げられた。

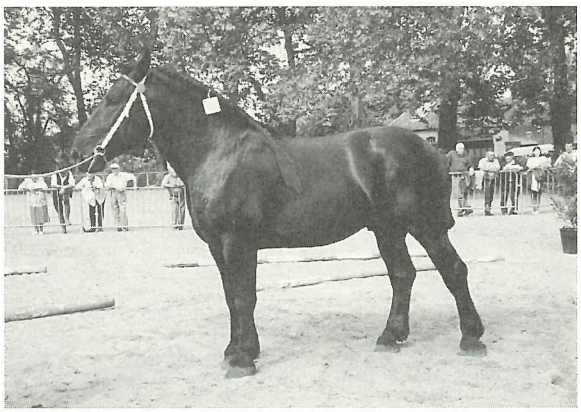


写真４　ペルシュロン雄，２歳，青毛
共進会大格の部で６位
体高172cm，管囲28.5cm　アメリカペルシュロンの子で34千フランで国立種馬所に買い上げられた。

げる方向に改良されている（Diligence；乗り合い馬車用）。一方，フランスのペルシュロンは胴が長く，肢は短く，アメリカではファームタイプと呼ばれるものである（Trait；重輓用）。さらにフランスのペルシュロンはほとんどが芦毛であるのに対し，アメリカから輸入されたペルシュロンは青毛が多く，その違いは一目瞭然である（写真３，４）。そのようなアメリカペルシュロンが，パン種馬所に買い上げられたので，かなり地元馬産家たちを混乱させたようである。また，ペルシュロン協会の会長も，馬車競技としての将来性を持つアメリカペルシュロンを好んでいるようであった。会議の結果は，ペルシュロンの改良方向を二つのタイプに分けて進めることが提案されていた。

また，2001年には３年ごとに開催されている第９回世界ペルシュロン大会がフランスのパン種馬所で盛大に開催された。その様子は，日本馬事協会から出されているホースメイト（vol.34）に報告されている。

## 4．国立種馬所（Haras Nationaux）

フランス全土には23の国立種馬所がある（図１）。これらの国立種馬所がフランスのドラフトホースを守っているといっても過言ではない。全国の国立種馬所の職員は約1,000名で，その運営資金は競馬の売上金で賄われているという。その主な仕事は，民間から優秀な種雄馬を買い上げ，繁殖季節には民間の雌馬に安い種付け料で提供することである。国立種馬所の歴史は古く，1665年ルイ14世の時代にコルベール（政治家）が種雄馬10数頭と繁殖用雌馬300頭をもつ王立種馬所を創設したことに始まる。その後，戦争や革命による荒廃，ナポレオン時代の隆盛，戦後のトラクター普及による衰退など，栄枯盛衰を経て今日に至っている。現在，サラブレッドの種馬の多くは民間で飼養されているが，トロッターフランセやセルフランセ，アングロアラブの有名な種雄馬の多くが国立種馬所の所有である。また，ドラフトホースの種雄馬の37％は国立種馬所が保有している。さらに現在の国立種馬所の役割は多様化し，様々な馬のイベント企画や普及・啓蒙活動の他，共進会や野外騎乗，乗馬練習などの目的のために種場所の施設や敷地を民間に開放している。私たちは，フランスでは最も規模が大きく，歴史も古いパン（Pin＝松）種馬所とブルトンの故郷にあるランバル（Lamballe）種馬所を訪問した。

パン種馬所はペルシュロンを多く繁養している種馬所でもある。そこでは約60頭の種雄馬を飼養しており，その内訳は以下の通りであった。

サラブレッド（８頭），トロッターフランセ（９頭），純血アラブ（３頭），アングロアラブ（１頭），セルフランセ（17頭），コネマラ（１頭），ポニーセルフランセ（３頭），ニューフォレスト（１頭），コブ（６頭），ペルシュロン（12頭）

パン種馬所の職員は65名で，そのうち直接馬を扱う職員は30名とのことであった。用地面積は400 haで，職員の給与を除く年間予算は，約600～700万フラン（約1,200～1,400万円）とのことであった。

ブルトンを多く繁養しているのはブルターニュ地方北部のランバル（Lamballe）種馬所である（写真５，６）。ランバル種馬所は1825年に設立され，現在，９品種合わせて65頭の種雄馬を飼育しており，そのうち43頭はブルトン種であった。

## 5．ドラフトホースの活用

国立種馬所の重要な仕事の一つは，ドラフトホースの飼養頭数の減少をくい止め，フランス原産馬の保存に努めることである。馬の文化が古くから引き継がれているフランスといえども，戦後は農村におけるドラフトホースの役割がトラクターとトラックに置き換わったことは他の欧米先進国の事情と同様である。ただ，幾つかのヨーロッパの国では馬肉が食べられているが，フランスに比較的ドラフトホースが多いのは食用という道が残されていたからでもある。本来の物を引く（ドラフト＝輓曳）という活用方法については，次のようなものが実施または検討されている。

①森林での間伐材切り出し，②乗馬クラブ等での作業用，③都市近郊の森林維持管理，④広告用，⑤レジャー用乗馬，⑥馬車トレーラによる旅行，⑦小型馬車による観光ツアー，⑧史跡めぐりの乗り物，⑨催し物・お祭りの呼び物，⑩スポーツ馬車競技，⑪２４時間馬の駅伝レース（魚の道）などである。

ここで，フランスでしか見ることのできないドラフトホースによる24時間馬の駅伝レース「魚の道（La Route du Poisson）」について紹介する。

ブローニュ・シュル・メール（英仏海峡に面した港町）とパリの間に鉄道が敷設されたのは1848年であった。それまでは「鮮魚特急」と呼ばれる鮮魚を積んだ馬車が毎日その間を走っており，約250～300 kmの距離を18時間から20時間で走っていたそうである。その間には幾つもの宿場町があり，そこで馬が交換されリレー方式で鮮魚を積んだ馬車が引き継がれていっ

写真５　ランバル種馬所のブルトンの雄，５歳，栗毛
トレブルトンで体高 161cm，体長 165cm，胸囲 223cm，管囲 29.5cm

写真６　ランバル種馬所にて馬車運動中のブルトン

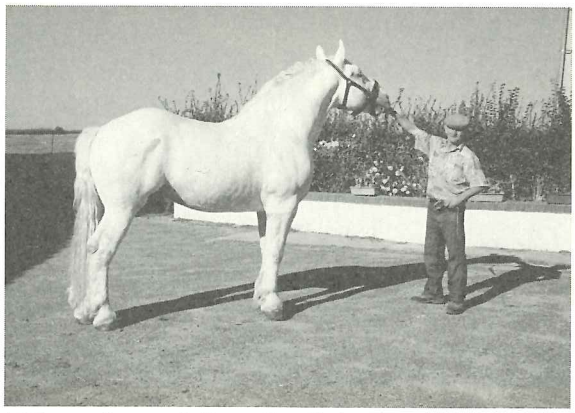


写真７　ブーロンネ雄，３歳，芦毛
体高 175cm，体長 176cm，胸囲 219cm，管囲 28.5cm

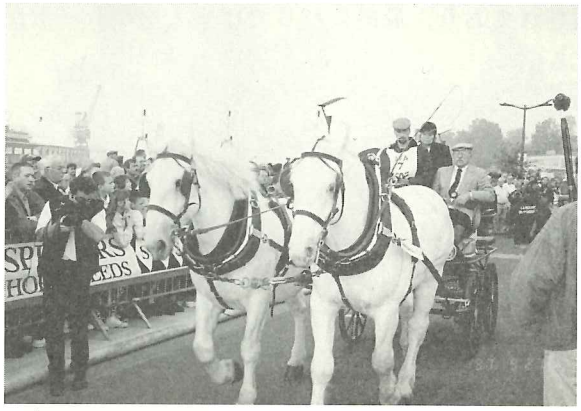


写真８　ドラフトホースの24時間馬の駅伝「魚の道」のスタート

た。この「鮮魚特急」に使われた馬がブーロンネである（写真７）。この品種は暗い夜道を走るとき良く目立つようにと芦毛が多いことは先にも述べたとおりである。また，頸には錨（いかり）マークの烙印が押されており，この馬の歴史を物語っている。

この「鮮魚特急」を再現した競技がコンピエーニュ種馬所と馬産家たちの発案で，1991年に始められた。我々の滞在期間中に第５回大会が開催された（写真８）。約300 kmの「魚の道」を21の区間に分け，区間ごとに馬を交換して走る。日本の駅伝競走に使われるタスキの代わりに馬車をリレーすると考えれば理解しやすい。時速約15 kmの速歩で走るよう要求されており，夜を徹しておよそ22時間ぶっ通しで行われる。２頭立馬車の後ろには審判員の乗った自動車が追走し，歩様や制御技術をチェックする。また，中継地点では走り終わった馬の獣医検査が行われる点はエンデュランス競技と似ている。30分以内に体調が充分回復しない馬（心拍数，呼吸数，体温を検査する）は，その後の区間は再度使えないことになっている。馬が入れ替わっていないかどうかをチェックするため，参加馬全

頭の頸には個体識別のための電子チップが埋め込まれている。さらに出発前の馬車によるマラソン競技や砂浜での重いボート引き競技，また途中では馬車交換のタイムを競ったり馬車御術競技などの点数も加味されるので，ただ単に速く走れば良いというものではない。今回は，品種別チームが7組，外国チームが2組，その他チーム（身障者チームもあった）が4組，計13チームが参加していた。恐らく参加馬の総数は300頭程度になると思われた。出発や中継地点の町，通過する町や村，支援企業（資金援助），テレビや新聞報道機関などが一体となって大会を盛り上げていた。さらに，ゴール地点のパリに到着するのが日曜の昼になるよう企画されており，最後にパリでは盛大なパレードが行われる。

## 6．ベルギーのドラフトホース

ベルギーのドラフトホースは1947年に265千頭であったが，1993年には6.3千頭まで減少した。その推移はトラクターの増加と対照的である（図4）。ベルギーでは馬肉を食すると聞いていたのでそのことを尋ねたところ，1993年の馬肉消費量は一人当たり1.7 kg／年であるが，その90％は輸入馬肉ということであった。すなわち，ベルギーのドラフトホースはほとんど食用として飼育されているのではなく，趣味・娯楽または絶滅から守るべき動物として飼育されているのである。

主要な品種はベルギー輓馬とベルギーアルデンネである。ベルギーは，面積，人口とも日本の12分の1にも満たない小さな国であるが，2つの民族からなる複数民族国家である。北にはゲルマン部族のフラマン人が住み，そこではオランダ語の方言であるフラマン語が話されている。南はローマ時代にシーザーに征服された地方であり，フランス語を話すワロン人が住んでいる。両民族間では，それぞれ独立した自治を有しており，ドラフトホースも異なっているのである。すなわち，ベルギー輓馬はフラマン人の馬であり，ベルギーアルデンネはワロン人の馬である。現在，ベルギー輓馬は5,000頭，ベルギーアルデンネは2,000頭程度飼育されている。

### a）ベルギー輓馬（Het Belgisch Trekpaard：フラマン語，Belgian Draught Horse：英語）

ベルギー輓馬は，古くからフランダースまたはブラバントとして知られ（いずれも地方名），ヨーロッパの幾つかのドラフトホースの品種改良に使われている。スタッドブックは1886年から残っており，歴史をさかのぼると3頭の種雄馬に行き着く。港での荷役の運搬用として使われたため，重い馬車が引ける大型の馬が多い。体高は160～170 cmである。毛色はほとんどが粕毛で，短く立った頸に小さく上品な顔と頭を持つ（写真9）。背は短く，肋は強いが肉が付かず頑健であり，性格はおとなしく従順である。

アメリカのベルジアンはベルギー輓馬が起源であるが，アメリカにベルギー輓馬が最初に持ち込まれたのは1866年であるから，当時は原産地であるベルギーにはまだスタッドブックはできていなかった。ベルギー輓馬の種雄馬の毛色は，粕毛64.9％，芦毛9.1％，鹿

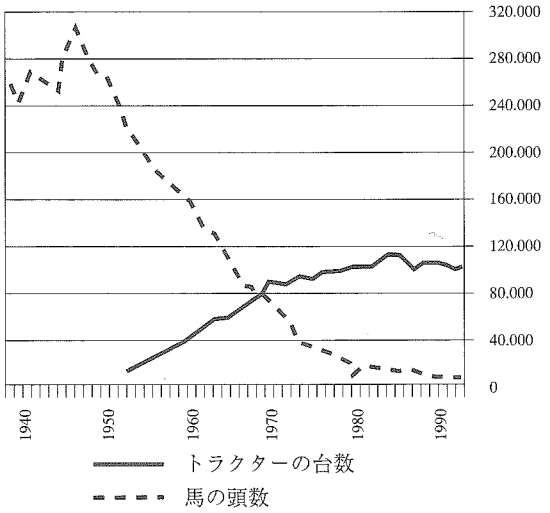



図4　ベルギーにおける馬の頭数とトラクターの台数の推移

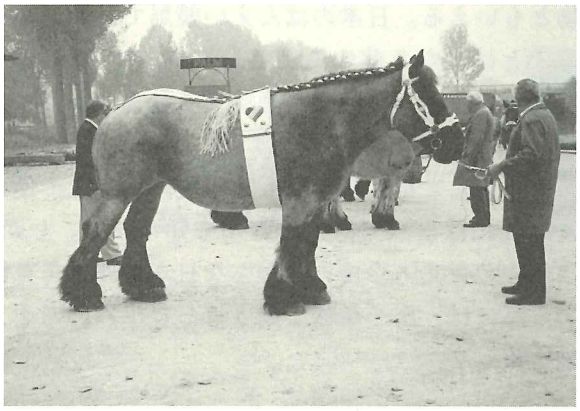


写真９　ベルギー輓馬（ブラバント）の雌，10歳，鹿粕毛
体高168cm，体長179cm，胸囲219cm，管囲30.5cm

写真10　PALMビール会社に集まってくれたベルギー輓馬協会の役員と馬産家たち

写真11　ベルギーアルデンネの雄，９歳，鹿粕毛　体高164cm，体長173cm，胸囲223cm，管囲32cm

写真12　ベルギーアルデンネとアラブの一代雑種（Ｆ１）

毛19.5％，栗毛3.6％，青毛2.6％であり，アメリカ，カナダから輸入されるベルジアンが栗毛ばかりなのとは大きく異なる。ただし，ベルギー輓馬の保存に力を入れている「PALM」というビール会社は，アメリカのベルジアンと同じ栗毛の馬を選んで飼育していた(写真10)。

**ｂ）アルデンネ（Ardennais：フランス語ではアルデネと発音）**

ベルギーのアルデンネもフランスのアルデンネと基本的には同じである。ただし，登録協会が異なるので，微妙に異なる特徴もみられるようだ。アルデンヌ地方は，標高500m程度の草原と森林の地帯である。ベルギーアルデンネはこのような山岳地帯の地形や内陸の気候によく適応した若干小型のドラフトホースである(写真11)。種雄馬の毛色は，粕毛32.1％，芦毛1.3％，鹿毛52.6％，栗毛11.5％，青毛2.6％であった。今でも300頭の馬が森林の木の切り出しに使われているという。ヨーロッパは環境問題に熱心で森林を大切にする。そのため，森林の伐採でも車の入る道をある程度の間隔でしか作ることが許されないので，道路までは馬で材木を運ぶ。最近はレジャーとして馬車が普及してきたので，アルデンネにアラブを交配して馬車用と

して改良する試験を実施している（写真12）。現在，一代雑種（Ｆ１）が50頭と，さらにアルデンネを交配した二代雑種（Ｆ２）が25頭いるとのことである。南の政府はアルデンネの馬産家たちに毎年4,800ベルギーフランの補助金を出しているとのことだった。

## 7．まとめ

フランスやベルギーのドラフトホースも戦後日本の馬がたどった道と同じように，農業の機械化と共に減少してきた。しかしながらフランスは，23カ所の国立種馬所で９品種のドラフトホースの種雄馬を繋養し，その活用の道を開くべく積極的な対策を講じている。この点では，フランスは世界で最もドラフトホースに対して国家的な支援体制が整備されている国といえる。

ベルギーでも絶滅の危機にあるとされた自国のドラフトホースに対して政府が保護の手を差し伸べている。このことは，アメリカやカナダのように，全くあるいはほとんど政府が関与していないのとは大きく違う点である。経済的には割の合わないドラフトホースが，近年ヨーロッパで増えつつある。これは，自分たちの祖先が作った家畜に対する誇りと，馬を愛する国民性，さらに自然環境に対する価値感の高まりとともに，EUや各国政府が馬関連の援助に力を入れ始めた賜物ともいえる。日本のばんえい競馬では馬に鞭を入れることは当たり前のことであるが，フランスでは，馬は人間の扶助（合図）を理解する動物であり，無理に鞭で打って動かすべきではないことを教えられた。このようなことは，日本でも馬を農耕用として使っていた時代には当然であったのかも知れない。しかし，経済優先の考え方が優先しがちな日本の競馬を見慣れている私には，馬を趣味で飼うヨーロッパの考え方が新鮮に映った。

## 参考文献


日本馬事協会編（1985）フランスの馬と人．馬事資料第12輯（及川浩吉訳）．日本馬事協会，東京．

日本馬事協会編（1986）フランスの乗馬と輓馬．馬事資料第13輯．日本馬事協会，東京．

日本馬事協会編（1998）フランスの馬のための国立種馬所．馬事資料第26輯（日仏経済技術交流会訳）．日本馬事協会，東京．

日本馬事協会編（2001）アルデンネ馬．馬事資料第28輯（日仏経済技術交流会訳）．日本馬事協会，東京．

柏村文郎・元田茂雄・平原榮人（1998）フランス・ベルギーにおける農用馬の実情―農用馬海外資源調査報告書Ⅱ―．日本馬事協会，東京．

Pelatan, J. (1985) The Percheron Horse, past and present. Association des Amis du Perch, France.